



教皇様の叢

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済
© 1993 発行所
財団法人 精道教育促進協会
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6
TEL.0797-31-3452・FAX.0797-31-3448

信仰の遺産

〈カトリック教会の要理書〉出版に関する使徒憲章

資料の整理

(一) 要理書は、聖書と教会の生ける聖伝、権威ある教導職の教え、そして神父たちと教会の聖人たちの霊的遺産を系統立てて正確に提示し、キリストの秘義に関する知識を深め、神の民の信仰を活気づけるものでなければなりません。また、何世紀にも渡って聖霊が教会に授けてきた教理上の宣言の数々をも考慮に入れるべきです。なお要理書は、現在をはじめて遭遇する状況と新たな課題を信仰の光で照らしたするための一助とならねばなりません。

このように要理書は、新しいものと古いもの(マテオ13・52参照)を合せ持ちます。信仰は常に変わりますが、常に新しい光を放っているからです。こうして二重の要求に応じるため、「カトリック教会の要理書」

は聖ピオ五世教皇の要理書と同じく古い伝統的な順序を踏襲して、本文を四つの部分に分けています。クレド、秘跡を中心とした聖なる典礼、十戒の説明から始まるキリスト教的な生活、そして最後にキリスト信者の祈りです。しかし同時に、要理書の内容は、新しい表現を取って現代の問題に答えようとしています。

四つの部分は互いに関連があります。キリストの秘義は信仰の対象であり(第一部)、典礼行為によって祝われ、伝えられます(第二部)。それは神の子らを行いにおいて力づけ、支えるために与えられます(第三部)。これこそ私たちの祈りの基礎となるものであり、そのすばらしい表現が「主の祈り」です。そして御父こそ私たちが祈願と賛美を捧げ、取りなしを願うべき御方です(第四部)。典礼それ自体は祈りであり、信

仰告白は礼拝の行為の中でなされます。秘跡がもたらす恩寵は、教会の典礼にあずかるために信仰が必要なのと同様、キリスト信者の生活にとっては不可欠なものです。信仰が行いに表れないなら、それは死んだものであり(ヤコボ2・14・16参照)、永遠の生命の実を結ぶことはできません。

「カトリック教会の要理書」を読めば、神の秘義、神の救いの御旨がすばらしい一致を見せていることがわかります。その中心にあるのはイエズス・キリスト、神の御独り子、父から遣わされ、聖霊によって処女マリアより御体を受けて人となられた私たちの救い主です。死んで復活されたキリストは常に教会の中に、とりわけ秘跡の中に現存しておられます。この方こそ私たちの信仰の源、キリスト信者の模範、祈りの教師です。

要理書の教理的な価値
去る6月25日に私が認可し、そして今日、使徒の権威をもって出版を命じた「カトリック教会の要理書」は、聖書と使徒の聖伝、お

よび教会の教導職によって証明され、照らされた、教会の信仰とカトリックの教えを述べたものです。私はこの要理書を、教会の一致と交わりのための正統かつ合法的な道具、また信仰を教える上での確かな規範とすることを宣言します。御国の光に向かう巡礼の途上で、聖霊がたえず呼びかける神の教会、キリストの肢体の刷新のために、この要理書が役立つように。

「カトリック教会の要理書」の認定と出版は、ベトロの後継者が聖なるカトリック教会と、平和のうちに使徒座と一致する全ての地方教会のために捧げる奉仕となるものです。すなわち、主イエズスに従う兄弟たち全ての信仰を支え、

「カトリック教会の要理書」出版に際しての、教皇様の使徒憲章の抄訳です。
今回の要理書の内容と役割について述べられた部分を訳出したものです。

固める(ルカ22・32参照)ため、また使徒からの同じ信仰に生きる一致のきずなを強めるための奉仕です。

そこで、私は教会の司牧者とキリスト信者の皆さんに、一致の精神でこの要理書を受けとめ、それを用いて信仰を宣言し、人々に福音の生活を呼びかける使命をたゆまず果たしてください。この要理書は、カトリックの教えを伝えるため、特に地方での要理教育のための、確かで信用のできる準拠テキストとして提示されるものです。また、はかり知れない救いの豊かさ(ヨハネ8・32参照)をより深く知りたいと願う全ての信者のために捧げられたものです。全キリスト信者の一致という聖なる望みによって進められている、教会一致の努力を支える意図をもって、カトリック信仰の内容とすばらしい調和を注意深く示しています。最後になりましたが、「カトリック教会の要理書」は、私たちの内にある希望の理由を尋ねる(1ペトロ3・15参照)全ての人、またカトリック教会は何を信するのかを知ろうと望む全ての人々のためなのです。

この要理書は、教会当局や教区の司教、教会会議が正式に認めた各地方の要理書に取って代わろうとするものではありません。それらが使徒座によって認可されたものなら、なおさらです。新しい要理書は、信仰の一致とカトリック教理への忠実を注意深く保ちつつ、さまざまな状況と文化を考慮に入れなければならない各地の要理書作成を励まし、助けるものなのです。(一) (九二・一一・十二)

※今回出版されたのは、仏語、伊語、スペイン語版などで、邦語訳はカトリック新聞によると1年半後になります。

技術革新

今世紀も終わろうとしている今、ヨーロッパの大学は新しい問題を抱え、新たな挑戦への対応を迫られています。経験科学のいちじるしい発展をみる一方で、技術によって、生産に関するあらゆる分野で産業化が進みました。他方で特殊専門化が進み、絶えず新しい職業が生れつつあります。このため大学のカリキュラムにも明らかな変化があらわれ、基礎課目と専門化した知識の間を揺れ動いているかのようです。それは必要に迫られて知識の各局面を分類していった結果です。同時に、製造産業と「サービスマニヤ」を指向した大学の進歩的な取り組みは、人文科学の研究や調査にマイナス効果を及ぼしています。人文科学はお金にならず、市場の論理とも相容れないからです。大学の役割は大きく変わり、伝統の保護者、精神を鍛える場、真・善・美を探究する所ではなくなつたようです。

しかし今日、大学が再び、経験科学の手段のみでは到達できない善への探究という広大な分野を拓く場となつてゐることを信じさせてくれる要素が数多く見られます。これはまことに健全で人間的な傾向です。どんなに洗練されたものであろうとテクノロジーの産物を越える内的理想を抱くという、人間に特有の欲求を表しているからです。(…)

科学技術のみに頼ってはならない

倫理面の重要性

(…) 科学技術にゆだねられた可能性はますます大きくふくれ上がり、ついに人々、科学研究の存在理由とはそもそも何であるのか、と問いかけるようになりまし。物質的に可能となつてきた。物的にも正当であるとは言いませぬ。個人の尊厳や価値に反する事柄もあるからです。科学は事物が「どうであるか」を教えてくださいますが、「いかにあるべきか」については沈黙しています。しかし、まさにこの問題、倫理的秩序を考慮しなければ、誰も真と善の要求にかなう生活を送ることができません。人はテクノロジーのみにて生きるにあらず、です。そういうわけで、今日では大学が理論研究・応用研究における倫理的な側面についての考察を促す、という特別な役割を帯びてゐることが、強く確信されるようになりました。新しい科学技術は、日常生活の中で倫理と法律上の面で深刻な衝突を引き起す場合があります。(…)

(四月十九日、ヨーロッパ大学総長会議で)

罪の傷を癒す改心

〈四旬節にあたって〉

★「私たちの罪をお赦しくください。」(答唱詩篇)

兄弟姉妹の皆さん、四旬節最初の金曜日、すなわち精神も新たに過越の秘義を祝うべく、私たちがいざなう改心の旅の始まりにあつて、典礼は私たちの唇に「あわれみ給え」の言葉をのほらせます。どちらも言明であり、祈りの言葉です。

まず何よりも、私たちは罪人である、という言明。信者なら、自分が神の子であり、たびたびこの愛のはからいに対して「嫌です」と言つたにも拘わらず、御父と兄弟姉妹たちとの交わりに生きるよう招かれてゐることを、謙虚に認めるはずで。

今耳にした神の言葉は、このことを黙想するよう呼びかけます。第一朗読は、私たちの使う表現方法とは異なる言語と文化をうかがわせるイメージに満ちた文体でつづられてゐますが、その中で聖書記者は常に人間を悩ませてきた問題に直面してゐます。神は人間に對してどんな計画をお持ちなのか？人間とこの世にある悪の存在をどのように説明すればよいのか？

それに答えるには、深い信仰が必要で。神はご自分に似せて人を造り、生命の息を吹き込み、ご

自分と人間同士の交わりのうちに生きるよう招かれました。人間は創造の主人として造られています。神ご自身が道徳行為の掟と法を人間の心に刻みつけ、善を選び悪を退ける力をお与えになりました。

人間の幸福と人類共同体内の兄弟的協調は、神の計画への忠実と従順いかににかかっています。★しかし始めから、個々の人間は常にこの神の計画から逃れ、神にかわつて自ら自分の人生と歴史の唯一の審判者となり、善悪の判断を決定しようとする誘惑を受けてきました。

改心は、神および兄弟姉妹たちとの一致と和解に達するため必要不可欠な条件であると同時に、神ご自身がお与えになる賜です。四旬節中に、この賜を願い求めましょう。

この誘惑に落ちると、人は目の前から神を締め出し、故意に神との交わりを断ち、ついには神がお与えになつた兄弟姉妹たちからも離れてしまします。「神のようになる」といふむなし理由づけは、それ自体、諦め、分裂、そして死

という悲しむべき結果をもたらすものであり、本人の生命と歴史を害するのみならず、兄弟たちとの関係、全宇宙との関係にまで影響を及ぼします。しかもそれらは、人類全体が起した反逆によつても傷つけられてゐるのです。

これが聖パウロの言う「罪悪の奥義」(IIテサロニケ2・7)ですが、それは誰もが経験し、証明できることです。ですから信じる者にとつて、悪とは単なる未知の心理的プロセス、あるいは正体のわからないプレッシャーなどではありません。罪の発端は、神に反抗する人間の自由で意図的な選択です。それが人間を生命から切り離し、神が歴史を支配されることを拒むのです。こうして、啓示が「罪」と呼んでゐる悪はそもそも初めから世に入り込み、今も世を支配しています。アダムを誰が味わうのです。

★ それでは、どうすればいいのでしょうか？ あきらめてしまいませんか？ 神の言葉はこの世に罪が存在することを教えていますが、同時に、希望に向けて心を開くよう招いてゐます。イエズス・キリストが罪を打ち砕いてくださったことを告げているのです。キリストは新しいアダム、「死に至るまで」従順を貫いて、全ての人を神と和解させたしるべである御子です。復活によつて、信じる人に聖霊の賜と豊かな恩寵を注いでくださいます。

イエズスはこのことをその使命

【カテケージス・シリーズ別売のお知らせ】
 「教皇様の声」に掲載されたカテケージスのシリーズのコピー版を別売しております。シリーズ(1)「創造」信仰と神「天使の創造」神の摂理…九二頁、一〇〇〇円
 (2)「イエズス・キリスト」真の人、真の神…一〇八頁、一二〇〇円 (3)「贖いと罪」聖霊…九七頁、一二〇〇円 ご希望の方は精道教育促進教会まで。

洗礼 恩寵の生活への入り口

教会シリーズ 12

の初めから宣言しておられます。人類との連帯のうちに、イエズスは荒野での四十日の間、試みをお受けになりました。そして、エジプトを出たイスラエル人が四十年の間に屈した誘惑、人々がその生涯のうちに屈してしまう誘惑に打ち勝たれたのです。

イエズスは勝利を得、御父の命令(「記されている通り」)への従順を通して、神の首位性を再確認しました。多くの兄弟姉妹たちの長子として、ご自分にならう者は誰でも、勝利を得ることができると保証して下さったのです。

★この勝利は、常に「賜」ではあります。個々の人間が積極的な、行いを伴った協力をしなにかぎり、手に入れることはできません。だからこそ改心が必要なのです。改心とは聖霊に導かれ、罪人を招く旅、神の言葉に照らされて自分の考え方や生き方をたえず問い直す旅のことです。

改心は和解と一致に達するための前提であり、不可欠の条件です。主に立ち返り、主との約束を更新するのにふさわしいこの四旬節中に、一層の粘り強さをもって改心を求めましょう。

罪の自覚は祈りを引き出します。

「主よ、我らを赦したまえ！」生き方、考え方を改め、神や人々と和解するためには、改心が神ご自身のお与えになる賜であり、改心させてくださるのは神であることもしっかり自覚し、その自覚に従った努力をしなければなりません。

1 第二バチカン公会議の教会憲章には次のように記されています。「組織的に構成されている司祭の共同体の聖なる性格は、秘跡と德行とを通して行動に移される。」(11番) 共通司祭職の行使は、キリスト教生活の泉である秘跡と密接に結び付いているということ。そしてさらに公会議は、「秘跡」と「徳」を結び付けています。秘跡の生活は一連の言葉や儀式にとどまるのではなく、信仰、希望、愛を表すものであることをこの意義深い結び付きは示す一方で、キリスト教生活におけるこれら二つの徳も他の徳も、秘跡を通して成長することを強調しています。従って、カトリックの教えによると、秘跡の礼拝を深めれば、キリスト教生活もそれに伴って深まることとなります。公会議はまず洗礼について述べています。洗礼の秘跡は人を教会の一員とし、司祭の共同体に招き入れます。「信者は洗礼によって教会に合体し、霊印をしるされてキリスト教の祭祀にあずかるよう委任を受け、神の子として生れかわって、神から教会を通して受けた信仰を人々の前に宣言する義務を負う。」(「教会憲章」11番)

このように教会憲章は、新約聖書から引き出され、教父や教会博士が伝える聖伝のうちに発展した教えを伝えていますが、今回は、その要点について考えてみましょう。

2 キリスト者の生活と洗礼の恩寵

洗礼によって私たちはキリストの体である教会に加わり、公会議は教えますが、それはパウロが書いている通りです。「一つの体となるために一つの霊によってみな洗礼を受ける。」(1コリント12・13)

教会共同体に入るための洗礼の役割と価値を強調することは大切です。今日でも、洗礼の役割を理解しようとして、特に子供たちの洗礼を遅らせたり、あるいは拒否する人たちがいます。しかし、教会の確かな伝統によれば、キリスト信者の生命は人間の意向によって始まるのではなく、神的效果を備えた秘跡によって始まるのです。秘跡は目に見えない恩寵の目に見えるしるしですが、その秘跡としての洗礼は、扉です。その扉を通して神は、人間の霊魂、生れたばかりの霊魂にも働きかけ、キリストと教会においてご自身にも結び合わせてくださいます。贖いのみわ

ざにあずからせ、「新しい命」を注ぎ込み、諸聖人の交わりに加われ、他の秘跡への道を開き、それによってキリストの命を十分に発展させることができるようにしてください。つまり洗礼は、生れ変わることで、人の子が神の子に生れ変わることなのです。

3 公会議が教えるように、洗礼を受けた者は「神の子として生れかわります。」

ここには父なる神を賛美する使徒ペトロの言葉がごだましています。「その大いなるあわれみにより、…私たちを新たに生れさせた」(1ペトロ1・3) そしてイエズスご自身、ニコデモにお教えになったことを聖ヨハネは書き記しています。「まことにまことに私は言う。水と霊によって生れぬ者は天の国に入れぬ。」(ヨハネ3・5)

イエズスが教えられるように、新しい誕生は聖霊によってもたらされます。テイトへの手紙がこれを強調しています。神は「再生の洗いと聖霊の一新によって」私たちを救われ、「救い主イエズス・キリストによって豊かに私たちの上に聖霊を注がれた。」(テイト3・5) 洗礼者ヨハネは聖霊による洗礼をすでに宣言してました。(マテオ3・11参照) またイエズスは、聖霊が「生かす(生命を与える)」(ヨハネ6・63)とも言われました。ニケア・コンスタンチノープル信経で「われは信ず。主なる聖霊、生命の与え主」と唱え、この啓示された真理にお

いて私たちの信仰を宣言します。福音書の言わんとする意味において、私たちは新しい命を受けて神の子になります。キリストは自ら制定した聖霊における洗礼によって私たちを神の子としてくださいます。つまり御父の子としての身分にあずかせてくださるのです。

4 洗礼とキリスト者の生活

洗礼の秘跡において、贖いの託身による新しい命への霊的誕生が実現します。秘跡を通して人は復活されたキリストと同じ命にあずかることができるようになります。これは洗礼がもたらす救いの効果です。「キリスト・イエズスにおいて洗礼を受けた私たちは、みなキリストの死において洗礼を受けた。…それは、御父の光栄によってキリストが死者の中からよみがえったように、私たちがまた新しい命に歩むためである。」(ローマ6・3・4)とパウロが記すローマ人への手紙の一節は、洗礼もつ司祭の側面をはつきり理解させてくれます。洗礼を受けるとは、イエズスの過越の秘義、神のよみされる完全な司祭としてのいけにえに個人的にあずかることです。この結びによって、洗礼を受けた者すべてが、その全生涯をキリストの奉獻と結ばれた司祭としての捧げ物とすることができるとです。(ローマ12・1、1ペトロ2・4(5参照))

洗礼によって、霊魂はキリストの命と共にその聖性で

不変の教え

満たされます。それは、解放と清めを通して神に属するものとなる新たな状態で、パウロがコリント人に述べる通りです。「主イエズス・キリストのみ名により、私たちの神の霊によって自分を洗い、そして聖とされ、そして義とされた。」(Iコリント6・11)

キリストは「水を注ぐことと、それに伴う言葉によって」全教会を清められました。洗礼は「清く汚れない」(エフェソ5・26)教会を造ります。それは罪からの解放であり、共同体全体に利益をもたらすため、たえず霊的に成長する行程の土台となります。(エフェソ2・21参照) 洗礼による聖化を受けて、個々のキリスト信者と共同体全体が聖なる生活を送る能力と義務を受けます。パウロが教えるように、洗礼を受けた者は「罪に死んだ」ので、罪の中で生きることを拒絶しなければなりません。(ローマ6・2)「あなたたちも、自分は罪に死んだ者、キリスト・イエズスにおいて神のために生きる者だと思え。」(ローマ6・11)

洗礼はキリストの死と復活、悪の力に対する勝利にあずかることを可能にします。

このように考えれば、洗礼式の意味を理解できるでしょう。そこで志願者は尋ねられます。「あなたは悪魔を退けますか。」罪とサタン力から完全に逃れ、地上で生きていく間中、サタンの誘惑と戦う約束を求められるのです。天の国に招かれるにふさわしい者

となるための、人間として完全になるための「良い戦い」の約束です。以上二つの理由で、幼児の洗礼においても要求とその受諾が重要なことです。幼児は両親と代父母を通してそれに答えます。そして秘跡の力を通して聖霊によって清められ、聖化され、新しい命で満たされ、キリストの命にあずかることとなります。

5 洗礼において、聖霊による新たな命と成聖の恩寵だけでなく、印章(霊印)と言われる印を受けます。これについてパウロはキリスト信者に「あなたたちも：約束のしるしを受けた」と言っています。(エフェソ1・13、4・30、IIコリント1・22参照) 印章(ギリシア語でスファラギス、ラテン語でカラクテル)は所属の印です。洗礼を受けた者はキリストの者、神の者となり、それによって根本的で完全な聖性が効力を得ます。パウロがキリスト信者を「聖徒」(ローマ1・7、Iコリント1・2、IIコリント1・1参照)と呼ぶのはこのためです。教会のメンバー全員が参与する司祭職も、聖性で満たされます。教会の中で、旧約が新たな方法で実現します。「私にとって、おまえたちは祭司の国、聖別された民となる。」(脱出の書19・6) これは洗礼によって与えられ、消えない印章によって守られた確かな永遠の聖別なのです。

6 トリエント公会議によれば、印章は三つの秘跡、つまり洗礼、堅信、叙階を通して靈魂に刻まれる「消すことのできない霊的なしるし」である、とキリスト教の聖伝は教えています。(DS285) この印は目に見えるものではありません。洗礼を受けた多くの人々の間でその効果、たとえば聖俗を問わず誠実なキリスト信者の言動に表れる、キリストと教会に所属しているという感覚が見られるとしても。

洗礼の秘跡は私たちに新しい命を授け、神の子とし、キリストの死と復活にあずからせ、悪に打ち勝つ力を与えます。洗礼によって消えない印を受けた私たちは、キリストの教会で神を礼拝する能力と義務を授かります。

この帰属感の一つのあらわれが、神を礼拝したいという熱望です。事実、第二バチカン公会議が確認している美しいキリスト教の聖伝は、信者は「洗礼の印章(霊印)によってキリスト教の祭祀にあずかるよう委任を受ける」、つまりキリストの教会において神を礼拝する、と伝えています。聖トマス・アクイナスはこの聖伝にもとづいて述べています。彼によれば印章は「霊的な力」であり(神学大全II, p.63, a2)、それによって、

洗礼を受けた者は、認められて集められたメンバーとして教会の礼拝、特に聖体の犠牲と秘跡の生活全体にあずかることができるようになります。消えない印章によって受けるこの能力は奪うことのできないものであり、取り去られないものなのです。洗礼によって始まる「新しい命」の秘義のまた別の面を発見して喜びに満たされま。それは「共通司祭職」の第一の秘跡の源です。その基本的義務は神を礼拝することなのです。しかしこの点でつけ加えなければならぬのが、印章によって与えられた能力には使命と義務が伴います。キリストの聖性を受けた者は誰でも、「自分のすべての行い」(Iペトロ1・15)を通してそれを世に示さなければなりません。そして秘跡、とりわけ聖体の秘跡にあずかって、聖性を養わなければなりません。

7 洗礼によって注ぎ込まれる聖霊の恩寵は印章を生きた生きとさせます。このような力強い働きの中で、この恩寵は、人となられ、十字架の上でも天国においても完全な礼拝を御父に捧げられた司祭キリストの命を私たちの中で成長、発展させ、キリスト信者が、キリストの犠牲(いけにえ)を再現させるために立てられた教会の、司祭職を分かち合うことを可能にします。

地上での生活中、キリストは全生涯を司祭としての犠牲のために捧げられました。それに続く私た

8 公会議は、日ごとに信仰を証し続けなければならぬと強調します。「神の子として生れかわり、教会を通して神からいただいた信仰を宣言しなければならぬ。」

パウロによれば、洗礼は光で照らす効果をもたらします。「キリストはあなたを照らすであらう。」(エフェソ5・14、ヘブライ6・4、10・32参照) 洗礼を受けた者は古い夜を去り、光のうちに住まなければなりません。「もともとあなたは闇であったが、今は主において光である。従って光の子として歩め。」(エフェソ5・8)

光に照らされたこの生命を、イエズスが要求された信仰告白で表すことができます。「人々の前で私の味方だと宣言する者を、私もまた天にいます父の前で味方だと宣言しよう。」(マテオ10・32)

キリスト信者が洗礼の恩寵に満たされて行う信仰告白、公会議が述べるように、「神から教会を通して受けた」(「教会憲章」11番)信仰告白です。それは普通の教会の告白でもあります。「行いと真実をもって」(ヨハネ3・18)私は信じます、と教会が毎日繰り返すように。

洗礼の印章とキリスト信者

「教皇様の声」ヨハネ・パウロ二世教皇の説教、書簡、講話等を解説なしにそのまま伝える月刊紙 毎月十日発行 定価 一部八十円 送料実費 一年予約九百円 送料六百元 二十部以上の一括購入なら送料不要

郵便振替 神戸 3-72393